



「おくりびと」が意
外と海外でも高く評価
されたのは、死者を送
る納棺の儀式の底に流
れる日本人の死者に対
する「弔い」「愛情」「深
い敬意」というものに
あろう。

(山崎努)

映画では、「納棺師」

の仕事が一般にさげす

まれる風潮にある中で、

主人公は懸命に厳かに

死者の旅立ち化粧を行

いだけにそ

れを跳ね返

そうとばかりに、禅や

茶道的作法を思わせる

納棺の儀式を心を込め

てひたすら行う。

その東洋的「様式美」

が海外では「神秘」に

映り、英語以外の外国

語映画部門としての物

う。

見守るのは親族など、

本当に故人の死を心か

ら悲しむ人だけである。

(ここが葬儀とは違うポイント

だろう)

◇

◇

弁護士日記

おくりびと

美和 勇夫

珍しさで評価を受けた
と思われる。

人が亡くなって納棺

の儀までは、登場人物

それぞれに心が通って

いいのだが、これが「葬

儀」とまでなると、も

ない読経とともに、参

列者が心から死者を弔

っているとは思われな

い。(しかしながらお坊様の

社会的評価は納棺師に比して

格段に高い)

◇

◇

この映

画は、前

評判以前

に何げな

く映画館

に足を運

べば、そ

れなりに「感性」に訴

えられるところがあ

り、死者を弔い心から悲

しまのではなくて、義

理のみで列席する人々

があまりに多い。

坊さんの長つたらし

い退屈わけの分から

持つて出向くと、それ
ほどのものでもない。
黒澤明監督の「赤ひ
げ」「生きる」のよう
な奥深さはなく、二度
三度でも繰り返し見た
い映画ではない。後世
に語り継がれ、レンタ
ルDVDで人気が出る
作品とも思われない。
「千の風になつて」
のような、マスコミが
人気をおおる一時的流
行のようなものである。
映画館には「おくり
びと」のじつちゃん
ばつちゃんが圧倒的に
多かった。
昨年是不作映画が多
く、その中で一番マシ
なものだったというこ
とではなからうか。

う日本の葬儀様式は海
外でも評価を受けない。
死者を弔い心から悲
しまのではなくて、義
理のみで列席する人々
があまりに多い。
坊さんの長つたらし
い退屈わけの分から

ところが「アカデミ
ー賞だ」「今年度最高
傑作だ」という期待を